



特 252
327



始



神武天皇聖蹟熊野荒坂津

特252
327



神武天皇聖蹟熊野荒坂津





神武天皇聖蹟熊野荒坂津

クマノノラサカノツ
熊野荒坂津とは、果して如何なる處か。そうして其の荒坂津が、我が日本の歴史と如何なる關係を有つてゐるのか。

斯の重大なる問題が、獨り一部の歴史家の間にのみ論議されてゐるに止り、廣く世上に忘れられてゐることを、われ／＼は黙して止むことが出来ないのである。

熊野荒坂津は、畏くも 皇祖神武天皇が御東征の御砌り、今の大阪の地から遙かに紀伊半島を御廻航になつて、熊野の地に幸せられ、そうして最後に御上陸あらせられたところである。

否菅に御上陸になつたのみならず、此の處に於て新に皇軍の陣容を御整へになり、それからいよ／＼大和の國に御討入になつたのである。

曩に 天皇が河内の方から東に向つて大和に御入りにならうとせられた時、不幸皇軍は利あらずして、皇兄五瀬命は、終に御戦傷の爲めに御かくれになつた。朕が敗れたのは、朕が日の神の裔であるにも拘らず、日の出る方向に向つて賊を撃つたからである。今より軍を班して東の方に廻り、日を背にし、日の神の神威を負うて進むことにしやう。

茲に於ていよく大阪灣を後に、波荒き紀州灘を熊野の方へ御迂回になり、それから御船を棄て、陸路を取らせられ、大和の背面を御衝きになることになつた。

其の犬和御背撃の新しい御策源地、其の 御軍の出発点とも云うべきところが、實に熊野荒坂の津であつた。熊野荒坂津は 神武天皇の御東征の歴史の上に於て、かくの如き重大なる關係を有つてゐるのである。

然るに斯の重大聖蹟に就て、古來學者間に異論が多く、はつきりとそれが何處であると決定してゐないのである。

今昭和十二年は、 神武天皇が荒坂津に御上陸になつてから恰も二千六百年に相當するので、近

く皇紀二千六百年を迎ふるに先立ち、先づ此の聖蹟を御闡明申し上げ度いと思ふ。

申すも畏きことながら、 神武天皇の御東征は、我が日本の歴史の上に於て、空前絶後とも申し上げべき御偉業であつた。それはまさしく天業を恢弘し、天下に光宅し給う遠大なる叡慮の下に、御決行あらせられたところの御宏謨であつた。

しかしながら、 天皇が西の國日向を出で立たして、中洲の地に都し給うまでには、陸には賊徒の 皇軍を遮り奉るあり、海には風浪の 御船を溺れしめんとするあり、畏くも 天皇には、其の間具さに艱苦を嘗めさせられ、而もよく之を御克服になつて、漸く最初の叡慮を御貫徹あらせられたのである。

殊にわれ／＼が今日から遙かに當時を偲び奉つて、最も恐懼措く能はざるところのものは、孔舎衛の役に 皇兄五瀬命を喪ひ給うて後、非常なる御決断の下に御敢行になつた、彼の熊野巡幸の、悲壯を極めさせられた御事蹟である。

天皇は今の大阪から和歌山の附近に出で坐し、それから御船に召して、一路遙かに紀伊半島の南

端を御迂回になり、熊野の地に御上陸になつたのである。此のことは古事記にもまた日本書紀にも記されてゐて、儼然たる歴史上の事實であるが、其の兩書の記事が一致してゐないために、熊野から大和へ果して何の道を取つて入り坐したかと云うことが、これまでの學者の間に、大きな疑問を投げかけてゐるのである。

ところで熊野に於ける 天皇の御事蹟については、古事記の記事が甚だ漠然たるもので、詳を盡してゐないに拘らず、日本書紀の方は、餘程精細に互つてゐる。

今暫く日本書紀によつて御順路を記し奉ると、熊野へ御廻航になつて、先づ狹野と云ふところに御著になり、それから熊野神邑へおいでになつて、天磐盾に御登りになり、更に海路を御前進になる御途上、風波が起つて、畏くも二皇兄 稻飯命と三毛入野命とが水に入つて御薨れになり、天皇の御船は、辛うじて熊野荒坂津に御到着になつた。

此の荒坂津に於て、 天皇は逆賊丹敷戸畔を御誅戮遊ばされたが、其の時惡神が毒氣を吐いて皇軍を阻み、將兵共に疲癒して復振ふことが出来なくなつた。たまく、熊野高倉下なるものがあつ

て、神の御告げによつて都 靈の御劍を得、それを 天皇に獻るに及んで、 皇軍が再び元氣を盛り返した。

茲に於て 天皇は海路御前進を止められ、轉じて山間に御入りになり、八咫鳥の嚮導により、道臣命が道を開いて、終に菟田の下 縣に御到着になつたとある。

此の日本書紀に見えてゐる狹野は、今の和歌山縣東牟婁郡三輪崎町の佐野であり、熊野神邑は新宮市であり、天磐盾は新宮市の西方に聳えてゐる神倉山の絶壁であると云ふことに、古人の説が大たい一致してゐるが、獨り荒坂津に至つては、諸説紛々として決しないのである。

日本書紀に謂ふ所の熊野高倉下のこと、八咫鳥のことは、古事記にも記されてゐる。けれども荒坂津のことは日本書紀に記されてゐるだけで、古事記には見えてゐない。

然るに茲に古事記に注意すべき記事がある。熊野より奥の方には荒 神が多い。此のまゝ前進されることは危険であると高木神から御誨があつた。依て路を山間に取つて吉野河の河尻の方へ出で坐し、更に山路を踏み穿ち越えて、宇陀へ御到着になつた。依て其の地を宇陀の穿と云ふとあるの

がそれである。

其の宇陀の穿とは、今の奈良縣宇陀郡宇賀志村のことであつて、日本書紀に菟田の下縣とあるのも、それと同じ處である。茲に於て、天皇が熊野から果して如何なる御路筋により、何の地を御通りになつて、目指す宇陀の地へ向はせられたかと云ふことが、學者間の一大問題となつて來るのである。

本居宣長先生は、今日の紀伊の北端、三重縣北牟婁郡錦村に御上陸になつて、^{伊勢}勢へ御入りになり、それから大杉谷の山間か、或は高見山の山道を経て、宇陀に御到着になつたと主張されてゐるが、新宮附近の學者は、ひとしく新宮から熊野川を浜られ、大和の吉野郡に御入りになり、十津川の山間を今の五條町の附近に出られて、それから更に吉野川の谷を浜つて、宇陀の方へ越えて行かれたと主張してゐるのである。けれどもわれ／＼は、此の二つの説の何れにも賛成し難い。

日本書紀によると、熊野に於ける 天皇最後の御到着地は荒坂津である。故に此の荒坂津が今日の何の地に當るか云ふ事さへはつきり分れば、天皇が大和へ御入りになつた御道筋は、自ら明か

になるわけである。即ち荒坂津の地點の決定は、此の問題を解くべき最後の鍵であると云つてよい。猶ほ前にも言つた如く、高倉下命の神劍奉獻によつて、皇軍の前途に輝かしい光明が認められ、いよ／＼從來の海路を御斷念あらせられ、陸路御進軍の大策を定めさせられたのも、此の荒坂津である。此のことは、既に日本書紀に明記するところである。即ち 神武天皇の大和御討入の基點として選ばれたのが、此の荒坂の津であつたのである。

熊野荒坂津は 天皇御東征の歴史の上に、かくも重大なる意義を有するところの地である。斯の故に、古人もこれが闡明には最も力を盡して來たのであるが、それが今の何の地に當るか云ふことになると、なか／＼異論が多いのであつて、本居宣長先生は北牟婁郡の錦村であるとし、他の學者の説には、東牟婁郡の那智の海岸、或は勝浦港、三輪崎港であるともされてゐるのである。

本居先生の錦説は、日本書紀に、荒坂津亦名丹敷浦とあるによられたものであるが、熊野には、「ニシキ」と云ふところが他にもある。西牟婁郡の串本町の傍にも、二色の袋と云ふ小灣があり、東牟婁郡の那智の海岸、赤色の濱の如きも亦「丹色」である。丹敷は必ずしも北牟婁郡の錦には限らぬ。

それから那智、勝浦、三輪崎は、何れも熊野川より南の方、今和歌山縣東牟婁郡の地である。ところが、日本書紀の荒坂津の記事は、熊野神邑の後に出現するのであつて、之を皇軍の進んで往かれた方向から考へて、荒坂津は、熊野神邑、即ち今の新宮市より猶ほ東北の方でなければならぬ。荒坂津を那智、勝浦、三輪崎附近に求める説は、此の點からして、成り立たないのである。故に強て此の説を立てやうとするには、日本書紀の文を前後に置きかへねばならぬことになるのであるが、そんな亂暴なことが許されるならば、歴史は滅茶になつて了ふ。

さて日本書紀の明文によつて、荒坂津が新宮以北であることが動かぬとなれば、それは果して何の處なのであらうか。本居宣長先生の養孫内遠先生は、今の三重縣南牟婁郡荒坂村二木島浦が、即ち古への荒坂津であると断定された。

内遠先生は、紀州藩が大藩の力を傾けて完成した、紀伊續風土記の編纂に關係された碩學である。先生は親しく各地を踏査され、勿論二木島浦へも來られて、詳かに實地を調査せられた結果、いよ／＼荒坂津は二木島に違ひないと云ふことを決定されたのである。それは宣長先生初め、其の他の

多くの學者等が唱へたやうな机上論ではない。此の點から見ても、内遠先生の説が、如何に權威のあるものであるか知られるのみならず、養祖父の宣長先生に對して、敢て憚るところなく異説を立てられることは、餘程固い自信があつてのことと思はれるのである。

われ／＼は、内遠先生の二木島説に深く敬意を表するものである。之を地理と文獻とに徴して、荒坂津は、二木島灣であることが、最も當を得てゐると思ふのである。猶ほわれ／＼は、熊野の山川は、曾て十數回に互り、かなり綿密に踏査してゐる。今茲に確信を以て、敢て之を斷言することを憚らない。即ち内遠先生が、「二木島」は「錦島」であり、其の隣村の「新鹿」は「荒坂」であるとせられたのは、當つてゐるのである。

既に荒坂の津と云ふ以上、そこは一方に荒坂、即ち嶮坂を負ひ、一方に津、即ち港を有するところの地でなくてはならない。然るに南牟婁郡荒坂村二木島浦は、北に曾根太郎、曾根次郎、南に逢神坂の屏風を立て回らしたやうな天險があり、其の下には、鏡のやうに靜かな良灣を擁してゐる。

熊野神邑、即ち新宮から前進せられた 皇軍が海難に遭はれて、御避難になつた處は、此の二木

島灣を指ては、斷じて他に之を求め難い。現に維新前の帆船時代には、二木島は避難港として、又風待港として、此の紀州沿岸に有名な港であり、遠江に漂著した支那の商船を護送して來た幕府の船も、此の港に避難して、滯船中に、其の船に乗つてゐた清人陳雲漳が病死し、現今其の墓も遺つてゐるのである。

元來、古へに熊野と云つたのは、紀伊の牟婁郡の地である。牟婁郡は、今東西南北の四郡に分れてゐるけれども、三重縣北牟婁郡の全部と、南牟婁郡の一部、二木島以北とは、江戸時代前に於ては、志摩の英虞郡に屬し、紀伊の内ではなかつた。従て熊野の内には入らなかつた。そして其の志摩と紀伊との國界が、今の二木島の地であつた。即ち二木島は紀伊の東北端なると同時に、志摩の南西端であつた。

二木島の灣奥に注ぐ一小流相川は、國と國との間を流れる川であり、新鹿村との境に奔る、舊熊野街道の逢神坂と云ふ坂の名も、國境を物語るものである。二木島灣口の兩岸に祀つて居る室古神社、阿古師神社と云ふ神社の社號も、「室」即ち紀伊の牟婁郡と「阿古」即ち志摩の英虞郡との兩端

が、此の二木島灣を夾んで、相接してゐることを考へしめるのである。

然るに、宣長先生が熊荒坂津に擬せられる錦浦は、今の北牟婁郡の最北端に位し、古くは志摩の國の内に入つてゐた處である。そこは紀伊の熊野ではなかつた。熊野でもない處に、如何にして熊野荒坂の津があらう。本居先生は、失禮乍ら歴史地理上の正確なる認識を闕いて居られた。其の論は要するに机上の空論以上の何ものでもない。今日より見れば固より取るに足らないものである。

此の以外、本居先生は、猶ほ重大なる過誤を犯してゐられる。高木神が神誨を下して、天皇の海路前進を止められ、天皇が其の御教によつて船を棄て、轉じて吉野の山間に入り坐したことは、古事記に明記するところである。而して之を日本書紀に併せ考ふれば、其の神誨の下つたのは、正に荒坂津のことであり、其の荒坂津は、熊野の荒坂津であつて、志摩及び伊勢の荒坂津ではないのである。されば天皇の熊野に於ける聖蹟は、二木島以北には及ばぬ。以上に依て、本居先生の説は、全然誤つて居るべきである。

要するに、新宮より更に前進された天皇が御上陸になつた熊野荒坂津は、新宮以北でなければ

ならない。そうして、熊野の内ではなければならぬ。然るに、今の北牟婁郡及び南牟婁郡の北部は、三百年以前に於ては、熊野の内ではなかつた。故に荒坂津の所在は、必ず其の以南の南牟婁郡内に限定せられなければならない。而して南牟婁郡内に於て、苟くも津と稱すべき程の港は、二木島を措ては、斷じて無いのである。

抑も 天皇の最後の御到着地點は、大和の宇陀である。試みに宇陀を目標として、熊野の海岸から其の地に達する最捷路を、地圖上に求め來るならば、それは南牟婁郡の木木町より、吉野郡の東部、北山、川上の谿谷を通ずる所の一線に歸するであらう。而も木本は七里濱に直面する荒磯の地で、船を寄すべき處ではない。依て其の最近接地に於て、然るべき良灣を求むれば、それは町の北三里を距る二木島より外に、絶対に之を見出すことが出來ないのである。

茲に於て最後の斷案は來る。曰く、

熊野荒坂津は、南牟婁郡荒坂村二木島灣である。

此の二木島を措て、荒坂津に擬すべき處は、斷じて無い。

昭和十二年十月二十五日印刷
昭和十二年十一月一日發行
非賣品

著者 大西源一

印刷者 奥村正二郎

印刷所 神都活版所

發行者 内田精一郎

發行所 荒坂津史蹟顯彰會

三重縣多氣郡相可町大字第百六番地

三重縣宇治山市岩淵町百拾貳番地

三重縣宇治山市岩淵町百拾貳番地

三重縣南牟婁郡荒坂村大字二木島南七百六拾番地

三重縣南牟婁郡荒坂村大字二木島南五百拾八番地

終

